

平成30年7月24日

## 農作物の高温と少雨対策

環境農業推進課  
産地・流通支援課

### 全般

- ア 高温下での長時間作業を避け、十分な水分補給と休息を確保する。体調がすぐれないときには作業を中止する。
- イ 作業服は吸湿性・通気性の良いものを着用し、帽子等の日焼け対策をおこなう。ハウス内の作業は気温が上がらない早朝に行う。

### 稲

#### ○早期水稻

- ア 収穫前の落水は、「コシヒカリ」は出穂後25～28日頃を目安とし、それまでは間断かん水を行う。落水以降、土壌の乾燥が甚だしい場合は枯れ熟れとならないよう、気温の低い時間帯に水を走らせる。

#### ○普通期水稻

- ア 中干し後のかん水は、根に急激な変化を与えないように、かん水と排水を2～3度繰り返す。
- イ 幼穂形成期～開花期は、最も水分を必要とする時期であるが、高温により地温が上昇し土壌の還元が進み、根腐れが激しくなる時期でもある。そのため、浅水にして、時々根に酸素を供給する。

### 露地野菜

- ア ケイントップや敷ワラ及びマルチングを充分行い、土壌水分を保つ。
- イ かん水や葉面散布は、日中を避け朝夕の地温の低い時間帯に行う。かん水は、畦全体が湿るよう十分な量を施用する。河川水をかん水に利用する場合は、ショウガでは根茎腐敗病、シシトウ、ピーマンでは疫病の発生の危険性があるので、これらの品目では使用を避ける。また、畝間かん水は湛水（滞水）ではなく、かけ流しで行う。草勢が弱っている場合はかん水時に薄い液肥を加える。

ウ 草勢が弱っている果菜類での収穫は、やや若採りとし、変形果などの不要なものは早めに摘果して、着果負担を軽減する。

エ 乾燥が続くとアブラムシやダニ類、ハスモンヨトウ、ミナミキイロアザミウマ、アワノメイガ、オオタバコガなど害虫の発生が多くなるので、防除に努める。

オ 薬剤散布は、日中の高温時には薬害の恐れがあるので、朝夕の温度が下がった時間に行う。なお、薬剤散布に先立ってかん水をしておくと、薬害の発生を少なくすることができる。

カ 土壌の乾燥に伴う、カルシウム欠乏、ホウ素欠乏等の生理障害対策として、必要に応じて葉面散布を行う。

キ は種（または定植）を行う品目については、あらかじめ十分に灌水しておき、は種（または定植）後も、定期的に灌水を行う。は種後、畝上に寒冷紗を被覆すると、畝の乾燥を軽減することができる。

## 施設野菜

ア 育苗中や定植後間もない株については、遮光（遮光率20～40%）を行い、施設内の気温や地温上昇の軽減を図る。ただし、遮光を行う場合、日中はハウスの換気に努め、夜間は遮光資材を巻きとって、ハウス外への放熱を促す。

## 花き

ア 育苗用のクーラーハウスの設定温度を超える場合は、3重被覆を行い冷房空間を小さくする。また、可能な場合は、鉢上げ等の大苗での定植を行う。

イ 循環扇の活用やハウス妻面の開放などを行い、十分換気を行う。

ウ ケイントップや切りワラ等でマルチングを行い土壌水分を保つ。

エ 定植前から寒冷紗や遮熱効果の高い資材で遮光し、気温、地温の上昇を抑える。

オ かん水は、日中を避け、気温の下がった夕方に行う。

カ 定植後の摘心は、強いピンチを避け、夕方など気温の低い時間帯に高節位でのソフトピンチを行う。また、株を刈り込む場合には、数本残して刈り込むか、高い位置で行う。

キ ハウス内にミスト設備がある場合は、一定時間ごとに細霧を発生させ、気化熱での気温低下を図る。

ク 乾燥が続くとアザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ、ヨトウ類の発生が多くなるので早期の防除に努める。

## 果 樹

ア 用水の確保に努め、敷ワラ、敷草等により、土壤水分の乾燥防止と保水に努める。草生園においては、草刈りを実施し雑草からの蒸散防止に努める。

イ かん水は日中を避け、気温の下がった夕方に行う。かん水量は1回当たり20～30mm、7～10日間隔を目安に実施する。少ない水を効果的に使用するには、点滴かん水を行うと良い。

ウ 防水透湿性シートによるマルチ栽培を行っている園地においては、かん水チューブによりドリップかんがい等を行う。

エ 果実の日焼け等の防止のため、適切なかん水のほか各種資材による遮光等の対策を講じる。

オ 干ばつ時に発生し易いハダニ類やサビダニ類の発生に十分注意し、発生初期からの薬剤防除に努める。

カ 着色遅延による収穫期の遅れとそれに伴う果実の過熟に注意し、適期収穫に努める。